

地域・海外リサーチセンター：ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター	
題目	「ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI 構想）」の具体化と社会実装
著者	松岡俊二、任羽佳、Hua Yan、Lin Weiyi

1. 研究の概要

福島における復興と廃炉に関する調査研究を、地域住民と多様な専門家とが協働して実施し、長期的・広域的な観点から将来像の選択肢を社会へ提示してきた。原子力災害から15年が経過した現在も、人口減少や帰還の困難さといった課題が続く中で、持続可能な地域社会の形成には、復興と廃炉を担う人材の育成と、その基盤となる「対話の場」＝「学びの場」の構築が不可欠である。本研究は、こうした場を通じた知識創出と人材育成を一体的に進め、社会イノベーションの創出を目指す。

2. 2025 年度の研究開発、成果

2025 年度も SI 構想をベースに、「1F 廃炉の先研究会」と「創造的復興研究会」を中心とした研究調査を行うとともに、それらと連動する形で「対話の場」＝「学びの場」の設計と実践を進めた。研究会（知の蓄積）、対話（地域との接続）、実践（現地での試行）を組み合わせることで、復興と廃炉をめぐる意思形成と人材育成の基盤を形成している。



「1F 廃炉の先研究会」では、燃料デブリの実態把握、中間貯蔵施設および県外最終処分意思決定過程、2051 年廃炉完了目標の妥当性、除去土壌の最終処分とその社会受容性、燃料デブリ取り出しや廃棄物問題、さらには原子力政策における合理性と信頼といった論点について段階的に検討を重ねた。これらの議論の蓄積を踏まえ、2026 年 1 月には『1F 廃炉の完了 2051 年』の見直しに関する提言』を取りまとめ、従来の廃炉完了目標の見直しの必要性とともに、「中間ステート」の設定や、科学と社会の協働による意思形成プロセスの重要性を社会に提示した。

「創造的復興研究会」では、原子力災害からの地域再生をめぐる政策対話の限界と可能性を踏まえつつ、浪江町津島地区において住民参加型環境アセスメントを軸とした「対話の場」

の設計と実践を進めた。放射線量測定や森林資源評価、キノコ栽培実験などの調査結果を共有し、成果報告会の開催も含めて地域の将来像について住民と専門家が議論する枠組みを構築し、帰還や里山再生をめぐる課題に対する相互学習型の対話を展開した。これにより、住民参加型環境アセスメントを政策対話の具体的手法として位置づけ、地域と協働した意思形成プロセスの可能性を示した。

「ふくしま学（楽）会」では、引き続き福島復興と廃炉に関わるテーマを深めた。本年度は、「1F 燃料デブリ取り出しを考える」および「福島 15 年：復興と廃炉の過去・現在・未来を考える」をテーマに議論を行い、長期的かつ不確実性の高い課題に対する多様な視点の共有と対話の重要性が再確認された。特に、「対話の場」としての機能に加え、「学びの場」として世代や立場を越えて議論を積み重ねる枠組みが継続的に評価されている。

また、本学の学生が「1F 地域塾」、「福島再生塾」、「ふくしま学（楽）会」に参加し、福島浜通りを訪問・視察する中で、原子力災害を自分ごととして捉える視点を体感的に獲得している。こうした経験は、専門知と地域の経験を接続する理解を深めるとともに、復興と廃炉を担う人材としての主体的な関与意識の形成につながっており、人材育成の観点からも重要な成果である。



3. 2026 年度の研究計画

次年度は、「1F 廃炉の先研究会」+「1F 地域塾」、「創造的復興研究会」+「福島再生塾」で蓄積してきた成果を踏まえつつ、新たに「福島・学びの場形成事業」を展開する。本事業では、これまでの「対話の場」を基盤に、それを継続的な「学びの場」として具体化し、地域と協働した知識創出と人材育成を進める。